

現代英米文化学会 会報

#003

Published 28 May 1990

題字は勝浦先生

【現代英米文化学会第73回例会のお知らせ】

今回は、会長の勤務されます立正大学大崎校舎で開催いたします。

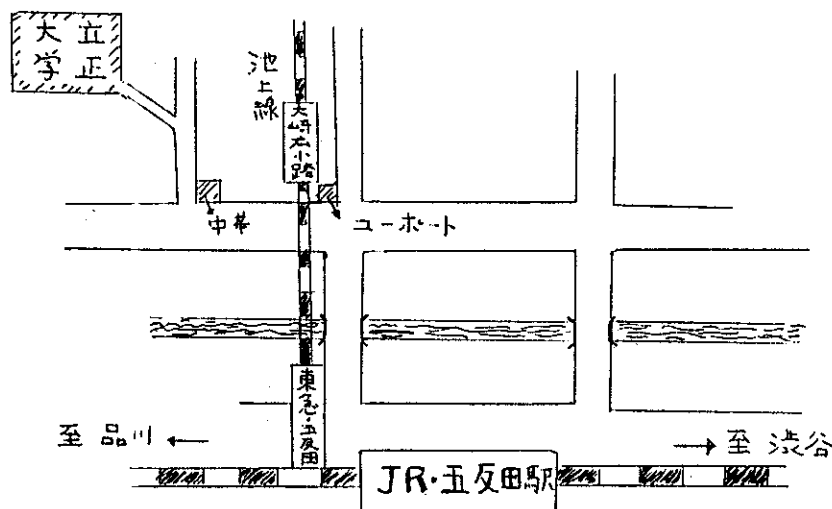
期日：6月16日（土）

会場：立正大学第一会議室（大）

演題：「タゴールの教育論と実践」

勝浦 吉雄 先生

その後で大会準備の仕事がありますので、会員の皆様にはどうか奮って御参加ください。



【現代英米文化学会の名称変更案】

当学会の名称が長すぎることから、いったい何の学会かわからないといった声もあり、名称の改定を検討しようという案が出ております。会員の皆様の御意見はいかががでしょうか。ちなみに現在使用中の名称から、漢字2文字を取ると、

現代英米学会、現代文化学会、英米文化学会、

の3種類の名称ができあがります。学会の将来の発展にとって、呼びやすい呼称は不可欠でありますので、ぜひ色々な御意見をお寄せください。他に案がでなければ上記の3種類から選ぶこととなりそうです。

また、会員から英語の名称を付けるようにとの御希望が多いので、英語の名称を決定したいと思います。この点についても会員の皆様からの案がありましたら、奮ってお寄せください。

【北海道大会について】

北海道大会の日程をそろそろ決定したいのですが、まだ申込まれていない会員（御家族、御友人も日程が合えば申込めます）は、大急ぎで申込んでください。
詳細は以下の通りです。

☆往復の航空運賃とホテルでの宿泊2泊朝食付きで 55000円

☆割愛願いは、佐藤治夫先生までお申越してください。

☆宿泊は ホテルリッチ札幌 電話 011-231-7891

シングル20、ツイン10確保済み

☆学会の大会は

9月7日 大ホール 16時から19時まで確保済み

各自夕食または夕飲

9月8日 大、小ホール 9時から19時まで確保済み

小ホールはキャンセル

☆講演 キリスト教の活動を中心にしたアメリカ文化

札幌大学外国語学部長 教授 加藤光男

☆発表予定者にまだ若干名の余裕があるのでお申込みを願います。

さつぽろ
ホテルリッチ札幌

JCB
UC DN DC MC VISA

☎011-231-7891
〒060 札幌市中央区北一条西3丁目

シングル	103室	5800~	6200円
ツイン	31室	11000~	12000円

(税サ別)

IN 12:00
OUT 11:00


〈交通〉 函館本線札幌駅から▲5分。千歳空港から☎1時間。

〈施設〉 地上10階地下2階。レストラン、喫茶、バー、宴会場、①契約駐車場(1泊500円)

〈食事〉 朝食1200円、夕食2000円～。レストラン「リコ」ではシャリアピンステーキがおすすめ。

〈特色〉 札幌市街の中心に位置し、時計台、大通公園まで▲2分。

〈開業〉 昭和48年



【他の学会開催案内】

10月13-14日

日本英学史学会

工学院大 新宿校舎 13日は午後1時開会



英国留学中、よく足を運んだところは大学図書館でしたので、大学図書館には色々な思い出があります。ここではオックスフォード大学の図書館についての話をしたと思います。

私が主に利用した図書館は、ボドリアン・ライブラリ(Bodleian Library)と英文学部図書館(English Faculty Library)です。ただ、どちらも入館許可証(reader's ticket)が必要です。幸いスーパーバイザーのステーブン・ギル先生(英文学部学部長)に推薦状を書いてもらいました。但し、短期研修で利用する場合は、所属の大学学長(日本)の推薦状があれば入館許可証は出してもらえます。

ボドリアンの場合は、Admissionsと書かれたドアを開けると入館手続をする部屋があります。受け付けでギル先生の推薦状を示すと、女性の係員から、図書館の使用目的や期間等について尋ねられました。オックスフォード大学の生んだ秀才オスカー・ワイルドとヴィクトリア朝文化の研究のために1年間参考文献を利用したい、と予め用意していた答をかなり緊張した面持ちで述べたことを今でも鮮明に覚えています。その後、身分証明としてパスポートの提示がありました。

日本ではワイルドは人気のある作家のようですね、と微笑を浮かべた係員は言ってくれました。写真が2枚必要だということで、その部屋に備えてあったスピード写真機で撮って貰いました。それから正式な手続として誓約書を読まされました。このことは英国らしいなと思いましたが、それがなんと日本語で書かれているのには驚きました。それだけ日本人の研究者の利用する機会が増えてきたのかもしれない。入館手数料として10ポンドを払うと、その場で入館許可証を手にする事ができました。

セントクロスビルディング内にある英文学部図書館では、手続はもっと簡単でした。受け付けのところで色々質問はされましたが、所定の用紙に名前と現住所を記入し、写真を2枚渡すだけのものでした。ここでは本の貸し出しはできます。

この時から学期中は毎日両図書館へ通いました。午前中は近代的な建物のセントクロスビルディングで行なわれていた英文学の講義に出席しました。空き時間は英文学部図書館を利用しました。とにかく学生が一杯で、よく勉強していました。昼食は教職員専用のハリファックスハウスか学生専用のオックスフォードユニオンでとっていました。午後からはボドリアンライブラリで調べものをするといった具合に、いつも決ったコースを歩いていました。週一回は私の所属していたリンカンコレッジ(1427年創立)へ、ギル先生やナイル・マククリーン先生に質問をしに足を運びました。時々、ワイルドのいたモードリン・コレッジ(1458年創立)のオールト・ライブラリにも出かけました。

モードリン・コレッジでは、コティス先生と図書館員のスコヴィル氏にはお世話になりました。オールト・ライブラリにはワイルドの初版本が数多くありますし、ワイルドの使っていた指輪が保管されていました。コティス先生の研究室にはワイルドの戯曲のマニュスクリプトがありました。感激して見せてもらいましたが、拝観料として1ポンドとられました。ワイルドが青春を謳歌した部屋は工事中でしたが、今ごろは完成して、セミナールームとして賑わっていることかと思えます。ボドリアン・ライブラリは、1602年開設のヨーロッパでは最古の公共図書館のひとつです。もとの図書館を復興させたもので、それを実行したのがトーマス・ボドリアン卿(Sir Thomas Bodleyn 1545-1613)で、この図書館の名前の由来になっています。ボドリアンよりも短くボドリィ(Bodley)と略称されることもあります。

ボドリアンはいわゆる参考図書館(reference library)ですので、館外への本の貸し出しは厳禁です。1階の入口の受付で入館許可証を見せて、必要以外のものは置いて入ります。帰りは守衛の方が荷物検査をします。はじめの頃はかなり厳しく鞆の中の本やノート調べられました。暫くすると、守衛の方々とも顔見知りになり、簡単な会話を交したり、励ましの言葉をいただくこともありました。ある時、ニュー・ボドリアン・ライブラリの館員であるタイトラー女史(日本女性)を紹介したいと言って案内してもらったこともありました。ニュー・ボドリアンには東洋関係(特に日本、中国、インド)の図書が揃っています。

ボドリアンの1階は観光客に公開している部分もあり、蔵書の一部を展示していますので、その膨大な内容を垣間見ることができます。石畳の階段を登って閲覧室へ行くのですが、最初のうちは、正直なところ、なにか牢獄へ入るような気がしました。階段途中の壁面には掲示板があり、学内行事、研究会、特別集中講義、芝居等の情報がわかるようになっています。この石造りの図書館は、一年間利用してみると、夏は涼しく冬は暖かいように感じました。

2階は lower reading room と言われていて、膨大な図書カードが整然と並んでいます。ここで必要な本はすべて調べます。生き字引のような図書館の方の説明ですと、書架が8マイル(約12km)、本は500万冊を超えるということでした。さながら、大学の研究と教育を支え、文化や伝統を創り出す知識の宝庫のようです。あるいはボドリアンはオックスフォード大学の「顔」とも言えそうです。

ここでは、必要な本を所定の用紙に記入すると、館員の方が探してくれます。英文学関係の本は3階の upper reading room にありましたので、そこで沈思黙考に耽っていました。この階の受付のところに行くと、先ほど頼んだ本が届くというシステムになっています。利用者が本を出し入れするということはありません。読みたい本は2週間キープすることができます。またコピーをしたいものがあれば、所定の用紙に記入しますと、帰りに1階の受付のところまで現金を払うと受けとることができます。それだけ貴重な文献が揃っていることになります。

ポドリアンは学期中は夜10時まで開館しています。学部学生・院生・教員が調べものをするには格好な場所になっています。木製の広い机には伝統が染み込んでいるかのようなですし、それぞれの席に蛍光灯がついています。壁面には革製の本が長い列をなして並んでいますし、同館と所縁のある人物の肖像画が掛っています。たいへん感激したのは、天井が非常に高いということです。読書や思索をするには快適です。いや空間が学術的な雰囲気を作り出しているような気がしました。ヘンリー・ジェームズの言葉を借りれば、知的なものを求める自由な雰囲気、があります。

私はオスカー・ワイルドの文献を19世紀の雑誌に大変興味をもちまして色々調べていました。ある時、隣に座っていた白髪の紳士が、タイプで打った原稿を丹念に読んでいまして、鉛筆で手を加えていました。ふと何気無くその原稿に目をやると、私が出席した講義の担当講師の名前が書いてありました。オックスフォードでは先輩の先生が後輩の原稿を読んで指導していることがわかりました。厳しさの中にも温かさが感じられ、これも伝統なのかと思いました。

ポドリアンでは、文献を捜すために、よく図書カードを調べていました。その時に感じたことがあります。日本で著名な英文学者の名前がカードにあまり載っていないことです。日本での英文学研究は、翻訳、紹介が中心なのかと、その時改めて感じました。勿論日本で翻訳、紹介は重要なことですが、英文で論文を発表しない限り、ここの図書カードには載りません。このことは、実は留学中の問題意識のひとつでしたし、私自身にも降り懸る課題かと考えています。

しかし、一方でこんなことも空想しました。現在、日本人の研究者や出版関係者が、英国の貴重な本を買占めています。ちょうど絵を買うように。日本の経済がそのまま続きますと、19世紀の大英帝国へ貴重な文献が流れ込んだように、英文学関係者の資料がかなり日本へ流れるような気がします。何十年か先には、英文学の研究をするには、日本の大学の方が文献が揃っている、英文学をやるには日本語を勉強しないと困る、とふとそのような妄想をいただきました。英国の学生は必死になってラテン語やギリシャ語を学んで古典文学を勉強しています。ラテン語は今日では死語ですし、古代ギリシャ語は現在のギリシャ人には簡単には読めません。そういったことを考えると興味深い問題のように思いますが、どうでしょうか。



ポドリアン・ライブラリ

発行 現代英米文化学会編集委員会
佐藤治夫、石原 強、相良英明、中村 豪、
大桃道幸、石川郁二、宮本正和

(投稿時の宛先)

通常郵便

郵便番号 101

千代田区神田駿河台 1-8-13

日本大学歯学部 佐藤英語研究室内

現代英米文化学会編集委員会 宛

電子メール

[DOMESTIC]

Nifty-Serve NAA00761 / PC-VAN XKF89898

[FOREIGN]

CompuServe 76662,112 / GENIE H.SATO